別添

入賞作品詳細

1　名古屋市（担当：市長室広報課　電話番号：052-972-4804）

部門	賞	作品名
ウェブサイト（都道府県・政令指定都市部）	読売新聞社賞佳作	名古屋市ウェブサイト

審査講評（公益社団法人日本広報協会）

名古屋城の屋根・金シャチを想起させる基調色により、地域イメージを鮮明に打ち出している。名古屋らしさが伝わり、サイト全体のカラーが統一されている。

トップページは見出しとコンテンツが整理されていて、情報区分が明確だ。見出しの視認性、文章の可読性が高い。コンテンツページもシンプルな装飾と適度な余白で構成され読みやすい。

グローバルナビゲーションをはじめ、サイト内検索、対象者別でさがす、人生のできごとからさがすなど、ユーザーの課題解決を重視したナビゲーションが充実している。膨大な情報を整然と収め「総合案内所」として機能させようという工夫が見られる点を評価したい。

○名古屋市ウェブサイト　名古屋市

○特色・ポイント（名古屋市）

・名古屋らしさが伝わるようなデザインとし、名古屋の魅力が伝わるビジュアルを大きく掲載。
　メインカラーは名古屋城の屋根の色（緑青色）、
　サブカラーは金シャチ(金色)をイメージ
・カテゴリーや対象を選ぶと該当の申請書やページが表示される「申請・手続き検索」や、選んだ条件に応じた情報が表示される「絞り込み検索」機能を搭載
・トップページに、対象者ごとにタブを切り替えることで、それぞれの対象者がよく利用する情報へのリンクを表示
・ごみの名称を入れると捨て方がわかる「ごみ・資源分別検索」や、お住まいの地区を入力すると収集日がわかる「ごみ・資源収集日検索」で、ごみの捨て方に迷ったときにすぐ解決可能
・生成 AI チャットボット「お助け NAGOT（ニャゴット)」が、利用者からのお問い合わせに自然な対話形式で回答（生成 AI がお答えするチャットボットは政令市初、試行導入・上限あり）
・日ごろから防災について学べる防災ポータルサイトを開設

２　大府市（担当：企画政策部企画広報戦略課　電話番号：0562-45-6214）

部門	賞	作品名
広報紙 （市部）	入選	『広報おおぶ』 （2025 年 12 月号）

審査講評（公益社団法人日本広報協会）

特集のテーマの一つは「やってみたいがかなうまち」。フェアトレードタウン推進委員会を中心に、紙面を大きくさいて活躍する人々を紹介している。フェアトレードの理念・活動を多くの市民が理解し、さらに様々な試みに広がっていくことが企画の狙いである。

こどもたちが映る表紙をめくるとマージャンをしているお年寄りが出現する。冒頭から幅広い読者層を意識していることが伝わる。本文を黒一色にせず他の色も採用するなどデザイン面での工夫が感じられ、丁寧に作られている印象である。色味は落ち着いた和風の印象で心地よい。

思わず途上国の人々の笑顔が見えてきそうな気になる。読み手は前向きな気持ちになれるのではないだろうか。

財政報告は用語の解説があり親切。主要施策を簡潔にまとめて紹介している点もわかりやすい。

○『広報おおぶ』（2025 年 12 月号）　大府市

○掲載意図（大府市）

大府市が、2025 年 7 月に行った「健康都市おおぶフェアトレード宣言」。

この取り組みの中心にいたのは、子育て中の母たちによる市民団体「おおぶフェアトレード推進委員会（以下、「委員会」）」。特集では、彼女らが続けてきた地道な活動が、市・議会・企業・市民に共感の輪を広げ、全国で８都市目となるフェアトレードタウン認定を目指すところまでを取材した（2026 年３月認定）。

取材中、委員会メンバーは口々に、まち全体が新しいことを受け入れる雰囲気にあふれ、応援してくれる人との出会いに恵まれたと話していた。市外から転入してきたメンバーは「このまちに来て『やってみたい』と言えるようになった」と、まちでの出会いが自らを変えたと語っていた。大府市内には 300 を超える市民団体が活動しているが、その活気の根拠は、このまちそのものにあるのではないか。「やってみたい」をかなえていく等身大の市民の姿を、委員会の活動を通して紹介した。

また、紙面全体を通して、特集のテーマ「やってみたいがかなうまち」を軸に、各コーナーでもさまざまな分野で活躍する市民の姿を掲載した。

３　知多市（担当：秘書広報課　電話番号：0562-36-2642）

部門	賞	作品名
広報写真 （組み写真部）	入選	『広報ちた』 （2025 年 10 月号　表紙）

審査講評（公益社団法人日本広報協会）

「知多市民美術展」の市長賞作品に焦点を当てた表紙。撮影者の視点が反映され、美術展への関心を喚起する構成となっている。静かな優しい光に照らされた作品と作者の組み写真に一目でくぎ付けになってしまった。

入賞作品を並べるのではなく、作品と作者を対に構成することで新たな視点を示している。どちらも光の使い方がうまく、作品には 2 灯、作者にはサイドからの柔らかな光量で紙面での魅せ方を心得ている印象だ。陰影を生かしたポートレートにより、作品と作家双方の存在感が引き立ち、視線を引き付ける仕上がりとなっている。

作者と作品が醸し出す、どこか似通った雰囲気が見る者を引き付ける。木彫りのぬくもりと匠（たくみ）の真摯な姿勢を鮮明に浮かび上がらせている。仕事への誇りを静かに可視化した、品格のある秀逸な組み写真だ。

○『広報ちた』（2025 年 10 月号　表紙）　知多市

○掲載意図（知多市）

知多市では、毎年秋に「知多市民美術展」を開催している。市民の力作が集まる美術展には、素晴らしい作品が多数出品されている。表紙左の写真は、令和６年度に彫刻・工芸部門で市長賞を受賞した作品『獲物の飛翔を探すハヤブサ』と、表紙右の写真がその制作者である。１片の木材から彫られたハヤブサは、１本１本の羽や足の細かな筋まで再現され、本物と見間違うほどの精巧な作品に驚いた。

表紙のレイアウトは一枚写真ではなく、作品と制作中の様子を並べた組み写真とし、木材に魂を宿す匠の技を表現しようと思った。質感と重厚さが感じられるように光と影を付け、２枚の写真の境界をぼかすことで、魂を吹き込む制作者と、魂が宿った作品との一体感を表している。

この組み写真を見て、こんな素晴らしい作品があるのかと、市民美術展に興味を持っていただき、たくさんの人に足を運んで欲しいという思いで掲載した。